



陳言コラム-10

中国雑談

萌えは、頭上の一本の草

しばらく日本で取材して、19日に帰ってきた。20日（日曜日）にいやいやながら家内（中国の場合、「家里領導」と言うが）と一緒に買物に出かけた。頭上に一本の草が生えている子供は何人も私の前を歩いていき、それを見て、楽しかった。

今、草や花からワラビ、小さなキノコやイチゴまで、さまざまなタイプのプラスチック製のヘアピンが年齢や性別の垣根を越えて、老若男女、俳優・タレントから猫や犬などのペットにまで広まっており、とどまるところを知らない勢いだ。成都の街角から杭州・西湖の岸边、北京・天安門、南京・秦淮河のほとりまで、この笑いを誘う不思議なヘアピンは一夜にして中国全土でブレイクし、老若男女の頭上に輝く人気アイテムとなっている。

これまでの流行の傾向と同じく、今回の流行にあやかってひと稼ぎしようとする者も少なくない。報道によると杭州にある無名のネットショップが、この流行のヘアピンを売り出して、1カ月で97万個も売り上げたとのことだ。

アニメの影響か

「頭上の一本の草」は、なぜ突然に大ブレイクしたのか？ 確かな答えを見出すのは恐らく難しいかもしれない。しかし、比較的信頼性の高い要因の一つとして、去年の中国国際アニメ祭が契機になったと言えるかもしれない。

あるアニメマニアは自作した小さなヘアピンをネット上に公開した。あるアニメでは萌えキャラの多くが頭上に一本の草が生えていたため、このヘアピンはネット上で瞬く間に広まり、大いに称賛された。その後、このヘアピンを思い切って大量生産した者がおり、アニメ祭の会場で販売したところ、アニメマニアの間で非常に好評を博し、アニメ祭が閉幕した後でさえ、この商品をあちこちで買い求める姿が見られた。

この状況を見て、多くの者がビジネスチャンスを見出したと感じ、同商品を大量に生産して売り出そうとした。その後さらに多くの種類の商品が作られ、花やキノコ、イチゴな



どさまざまなヘアピンが店に並んだ。そうして一夜にして、街中のあちこちで「動く植物」を見かけるといふ奇妙な現象が生まれた。

「萌え」からみる多様性

今の中国では、「頭上の一本の草」が集団で萌えをアピールするアイテムとなっているが、「萌」の概念はもともと80年代の日本で生まれたもので、社会心理学の観点から言えば、社会の巨大な圧力の下で表れる反応の一種で、現実の圧力や不安を緩和する手段だといふ。さらに言えば、萌えをアピールすることはある種の「尻込み」であり、何の悩みもなかった子供時代に戻りたいという願望の表れだといふ。「萌え文化」の世界は人々の「隠れ場」と化している。

一方、街中にあふれる頭上に草をいただいた「萌え国民」に対する批判も少なくない。ネット上ではこの現象をバカの集団と嘲笑されており、「頭上に草が生えるのは、脳に水がたまっている（バカげている）からだ」といった中傷的なコメントも見られる。

しかし、こうした批判や中傷をものともせず流行はさらに進み、より突飛なヘアピンも続々登場している。若い女性たちの間では、鳥の手羽先や肉のスライス、骨付き肉、大きな海老、果てはゴキブリのヘアピンなどで髪を飾る人もいる。現在の中国では、一人ひとりがみな自分の個性を表現したいと願っている。特に若い世代は他人の目を気にしない人がますます増えている。そして、この流行のトレンドは現代中国の社会文化における多様性と自由度をある程度表現しているという意見が主流になっている。

陳言 日本語日刊紙『速読中国』編集長。

連絡先: chenyan@seapush.com